指導上の注意点

・「導入の問い」のねらい

「離さない」というタイトルから、どのようなストーリーを想像しますか。

（ねらい）「離さない」という言葉が持つ印象や言葉の力の強さを感じてほしい。本文には、「離さない」のほか、「離れられない」「離せない」など、「離～」という言葉が出てくるが、それぞれの言葉の持つ印象について考えるとともに、人魚が発する唯一の言葉がなぜ「離さない」だったのか、また、この言葉が、「わたし」や「エノモトさん」になぜ恐怖を与えたのかを考えさせたい。

●二四三ページ

問 **◎「そのくらいの仲である。」（上9行目）という表現から、どのようなことが分かるか。**

答 私とエノモトさんは、ときどきコーヒーを飲んで世間話をする程度の、特別親しい関係ではないということ。

●二四五ページ

問 **「しばらくじっと見ていると、」（上18行目）から続く部分にはどのような表現効果があるか。**

答 「わかった」「らしい」「なのだった」と、認識、懐疑、断定へと表現が変化することで、人魚を見たときの驚きを段階的に表わす効果。

補 驚きと同時に魅了されていく様子が効果的に描かれている。

●二四六ページ

問 **「こういうわけなんで」（上4行目）とあるが、エノモトさんが伝えたかったのはどのようなことか。**

答 エノモトさんが、実際に人魚を手に入れたのだということ。

補 人魚を手に入れたということが荒唐無稽な話だと自覚しているが、とにもかくにも人魚が自宅にいるという証拠を示した。また、曖昧な言葉で表現したのは、人魚が実在するという事実や、人魚から離れがたくなる気持ちについて、はっきりと言葉で説明できなかったから。

問 **◎「人魚、と言いかけたが…言いなおした」（上10行目）ことから、「人魚」をどのような存在として捉えていることが分かるか。**

答 高度な意識を有する、人間と同等の存在。

補 人魚が人語を解するかどうか分からなかったが、自分が人間以外のものに「人間」と呼ばれたら気分悪かろうと思ったからである。とある。「人魚」という種の呼び名でなく、「この」をつけ、「このひと」と呼ぶことで、人魚を個体として尊重していることが分かる。

●二四七ページ

問 **「交番に届けるものなの？」（上12行目）という「わたし」の問いかけに対しエノモトさんが「真面目に聞いてよ」（上14行目）と答えたのはなぜか。**

答 エノモトさんは人魚をただの物ではなく人のように感じており、行く当てのない人魚を交番にとどけて相談するのが適切だと思っていたから。

補 エノモトさんにとっては人魚を保護するために連れ帰ったのであるが、「わたし」にとっては「拾得物の処理」であるという認識の違いがある。「わたし」の質問が、話の腰を折るようなものに思えたのである。

●二四八ページ

問 **◎「エノモトさん」は、なぜ、「わたし」に相談したのか。**

答 このままではいけない、このまま人魚と一緒にいるとだめになってしまうと思い、とにかくこの状況を誰かに話したかったから。

問 **◎「このありさま」（下1行目）とは、具体的にどのような状態を指すか。**

答 人魚のそばに行きたくていてもたってもいられず、いちばんいいのは人魚を海に帰すことだが、知らないふりをする状態。

問 **「エノモトさんはどんなかと思うと、少しばかりぞっとした。」（下1行目）とあるが、この後エノモトさんは「どんな」状態になるか。**

答 何を考えているのか分からないような表情でただ黙ってわたしを睨み続ける放心状態。

補 いずれ「わたし」も同様の状態を反復することになる展開の伏線であることに気付かせたい。後の「うわあ」という声とともに走り出す姿も同じである。

問 **◉人魚を「最後は預かることになってしまった」（下2行目）のは、なぜか。**

答 ひとつはエノモトさんがこのままではダメになってしまう、と思ったから。それに加え、この時点でわたしは既に人魚のそばを離れたくなくなっており、人魚を離せなくなっていたから。

●二四九ページ

問 **◉「エノモトさんと同じ状態」（下11行目）とは、どういう状態か。**

答 人魚のそばを離れられない。外に出ているときの記憶があまりない。誰としゃべってもおもしろくない。電話にも出ない。つまり、外とのつながりを絶っている状態。

●二五〇ページ

問 **「これではいけない」（上10行目）とあるが、どのようなことが「いけない」のか。**

答 人魚に没頭して現実世界に適応できなくなってしまうこと。

補 エノモトさんの「このままでは自分はだめになってしまう。」（二四八・上16）という思いと同じ。

問 **◉「エノモトさん」の「人魚を取りに来た」（下4行目）という言葉から、どのようなことが分かるか。**

答 エノモトさんの人魚への執着が弱まり、落ちつきを取り戻したこと。

補 「迎えに来た」ではなく、「取りに来た」という言葉から、人魚が「モノ」に戻っていることが分かる。一週間人魚と離れたことにより、思考を取り戻している。

●二五一ページ

問 **「その声はさきほど来の声よりも少し弱々しかった。」（下15行目）のは、なぜか。**

答 エノモトさんも人魚への執着を断ち切れてはいないから。

補 人魚を運び出す際に、「ぼくだって長くそばにいればまた元に戻ってしまう。」（二五〇・下19）とある。

●二五二ページ

問 **◉「エノモトさんの笑いを見て、人魚を離せそうな気がした」（下11行目）のは、なぜか。**

答 「笑い」という、人の「感情」を表す表情を見ることによって、自分の感情（人間性）を取り戻し、緊張感が緩められたから。

●二五三ページ

問 **◉人魚が「わたしだけを見ている」（上1行目）のは、なぜか。**

答 エノモトさんは一度人魚を離しており、エノモトさんのことはもう見限っているから。人魚が今執着しているのはわたしだから。

問 **◉「やっぱり離れられない」（上4行目）と思ったのに、人魚に「離さない」と言われて、「わたし」が逃げたのは、なぜか。**

答 人魚から離れないことは自分の意思によるものであり、人魚の処遇を自分で決定することができると思っていたが、人魚の言葉によって実際は人魚の方が優位にあることに気づかされて、恐ろしくなったから。

補 この言葉により、執着する、されるの立場が逆転したから。自分が人魚から離れられないと思っていたのに、実は反対で、人魚のほうが自分に執着していたことに気づき、その執

着の強さに恐怖を感じたのである。

●二五四ページ

問 **◎「離さないでいるだけの強さ」（下 10 行目）とは、どのようなものか。**

答 人魚を離さないことと引き換えに、他者や社会とのつながりを絶ち、人間らしさを喪失してまで人魚と一緒に居続けることを恐れない強さ。

語句の研究

●二四三ページ

上1妙なもの　人魚のこと。後（二四四・上2、3）にも同じ表現が繰り返され、「わたし」同様に読者も「妙なもの」の正体に興味を持つようになる。印象的な冒頭部分である。

キー・ポイント　エノモトさん　カタカナ表記により、読み手が自由に人物像を思い描くことができる。「画家兼高校教師」であり、「わたしの部屋の真上の部屋に住んでいる」ことや、部屋の様子、コーヒーの淹れ方などが詳細に描かれる一方で、外見に関する描写は「髭をしごいた」（二四五・下7）こと程度で、ほとんどない。川上弘美は「あまり登場人物に色がつかないように」「カタカナにすることが多い」と述べている。（「広告批評」一部を書いて全部を書きたい　マドラ出版　平成十三）

上6とんとん　ここでは階段を上り下りする擬音語。軽快な印象で、エノモトさんとの気軽な間柄が連想される。

上11男所帯　男だけで女のいない暮らしのこと。他に「髭をしごいた」（二四五・下7）という部分で、エノモトさんの性別が分かる。

下3輪郭がくっきり　「画の道具」「カメラ」「雑誌」など、モノが多数置かれている部屋だと分かる。エノモトさんの人物像を想像する手がかりになる箇所でもある。

下6手動のミルで豆を挽き、布で漉す。　エノモトさんのこだわりの一面。本人の外見描写はほとんどないが、このように様々なモノを配置して人となりを表現している。

下8たいへんよろしきものなのである。　文語的な表現。「わたし」がエノモトさんのコーヒーを楽しみ、またありがたいものとして頂戴している様子とも読める。川上弘美は「よく古い言葉を使ってるって言われます。自分ではそんなつもりはないんだけど、書いているうちに自然と出てくるみたいで。」と述べている。（「広告批評」一部を書いて全部を書きたい　マドラ出版　平成十三）

●二四四ページ

キー・ポイント　桜が咲きはじめていた。　これ以降、要所要所で桜が描かれ、場面状況のと密接に関連した役割を果たす。エノモトさんが人魚を手に入れたのは物語の「二か月ほど前」、つまり二月初旬、桜のつぼみが膨らみ始める時期である。そして物語が始まるのが「咲きはじめ」の時期なので四月初旬、「わたし」が人魚を預かって一週間後に満開を過ぎ散り始め、最後の場面では「すっかり散って」いる。このように時間の推移が告げられつつ、それぞれの場面の印象を強めている。また、桜の満開に向けて人魚への執着度の高まりを示し、クライマックスである海の場面では、降り注ぐほどの花びらと人魚からの強烈な執着の恐怖を印象付ける効果もある。さらに、桜と人魚の描写を重ねることで、すべては桜がもたらした幻想のようにも読めるだろう。

上18何かの匂いがした。　この段階でもまだこの匂いが人魚のものであるとは明かされておらず、読者の興味を引きつける。

上20画架　絵を描く時にカンバスや画板を支える台。イーゼル。

下7少し痩せたか。　以前に比べ痩せているとの「わたし」感じているのであり、エノモトさんの元来の容姿に関することではない。痩せたのは人魚に執着するが故であろう。

下8エノモトさん、元気だった？　と聞くと、　「わたし」の台詞には引用符（「　」）がついていない。一人称語りが地の文と溶け合うように作品が成立している。「わたし」からの視点であることの強調、文章のリズムを良くすること、エノモトさんへの発話が読者にも向

けられているように感じられ物語世界に引き込まれるような効果などがある。

下9 眉をよせながら　不快や憂いの念などから眉の寄ったような表情をすること。眉をひそめる。ここでは話の腰を折られたように思った不愉快を示す。

●二四五ページ

キー・ポイント　まぐろよりは小さく、鯛よりは大きい。　まぐろの全長は約二〜三メートル。鯛の全長は約五十センチメートル。後に「人間の大人の三分の一ほどの大きさ」（二四五・下3）とあるように、ここでは具体的な大きさを示すというより、魚との比較をあえてする表現。また、この後に詳細な記述が続くが、登場人物とは対照的に、人魚について一定の外見イメージを読者が想像することになる。人魚を想像するときアニメや漫画的な表現をイメージしがちだが、非現実的な存在であるからこそ外見の特徴を丹念に描きリアルで具体的なイメージを持つことができる。あくまで現実世界で起きる出来事なのであり、ただのファンタジーとは違う絶妙なバランスの物語世界になっている。

上13 造作　「ぞうさく」。建築や建築内部の総称。比喩的に、顔のつくり、目鼻立ちのこと。

下7 髭をしごいた。　長い「髭」はエノモトさんの外見に関する数少ない記述の一つ。

下19 潮の匂いが強かった。　人魚は、初期の川上作品の特徴である、異種といもいうべき存在である。ややもするとアニメやおとぎ話で描かれるようなファンタジー的要素の強い存在だが、ここでは嗅覚的特徴を示すことで現実味を持たせ、人魚の外見をリアルに描いたことと同様に、幻想と現実が混ざり合うようにバランスを保っている。

●二四六ページ

上10 人魚、と言いかけたがやめにして、　「人魚」という種の呼び名でなく、「この」をつけ、「このひと」と呼ぶことで、人魚を個体として尊重していることが分かる。また、初めて人魚を見た時に既に、人魚に魅了され始めていたのである。

上17 盥　水や湯を入れて顔や手足を洗う器の総称。

上17 鯵　アジ科の魚の総称。全長約三十センチメートル。食用。

下20 人魚がいかに人を惹きつけて離さないか　「惹きつける」は、人の心を誘い寄せる、魅了するの意。ここで題名の「離さない」という言葉が出る。ギリシア神話の「セイレーン」や、「ローレライ伝説」を始め、各地に残る人魚伝説などを例として挙げることができるだろう。

●二四七ページ

上12 顔をしかめ　不快などから表情をゆがめること。

上17 真面目に拾得物の処理方法について考えてるんだわよ。　「わたし」はまだ人魚に完全に魅了されておらず、「拾得物」と表現しているが、エノモトさんにとって人魚は「物」ではなく、話がかみ合わない。また、この言葉遣いから「わたし」が女性であると判断できる。他に「お茶でもいれるわよ。」（二四八・下8）、「むつかしいわよ。」（二五二・下10）が同様の言葉遣いとして出てくる。

下1 最初は、　後に続くのはエノモトさんの言葉だが、「　」がついていない。一時的にエノモトさん視点の語りに切り替わり、地の文に混ざり合っている。「二か月前、南方に旅をした。」（二四四・下20）から始まる段落も同様。

下3 おっくう　面倒くさくて気が進まないこと。

下6 一刻も早く　わずかの時間も猶予がないこと。

下10 画布　油絵を描くのに用いる布。キャンバス。カンバス。

●二四八ページ

上7いてもたってもいられない　不安や苛立ち、喜びなどで、じっとしていられない様子。

下9エノモトさんは浴槽から動こうとしない。　エノモトさんの様子が急に変わった場面。「わたし」が自室に戻って浴槽に水を入れている間に、エノモトさん一人だけで人魚と一緒にいたことで、人魚に強く魅了されてしまったと考えられる。

●二四九ページ

上4エノモトさんの気配が部屋じゅうに濃く漂っている。　放心状態のエノモトさんが夜になっても人魚のいる浴室に長時間残っており、何が起きているのかも「わたし」には分からず、異様な緊張がはりつめている様子。浴室で人魚を見ているエノモトさんの存在を意識せずにはいられない様子。

上13 コップに浮かせた桜の花びらのように、ふわりと水に浮きながら、人魚は眠っていた。　「花びらは、水に浮いてふよふよと漂った。」（二四四・上12）にある桜の花びらと、人魚のイメージが重なる描写。また、エノモトさんの錯乱状態と落ち着いた人魚の様子が対照的に描かれ、読者に不気味な印象を与える。

下7会社に行き家に帰り食事をとり人魚を眺め眠った。　前後で同様の表現が繰り返され、段々と人魚の記述が増える。「わたし」が人魚に執着し、没頭していく様子。淡々と描かれることにより、「わたし」の生気が失われていくことが強調される。

●二五〇ページ

キー・ポイント　エノモトさんとだけは僅かに喋りたいような気がした。　外部とのつながりを断って人魚に執着するなかで、エノモトさんとだけはどこかで関わりを求めるのは、二人の同質性や、近すぎず遠からずという距離感からであろう。エノモトさんが「わたし」に相談することにしたからこの物語は始まったのである。またこの記述から、この作品を「わたし」と人魚の物語ではなく、「わたし」とエノモトさんの物語として読むこともできる。

上16 インターフォン　interphone（英語）。玄関と室内、部屋と部屋との通話に用いる私設有線通話装置。

下13「海に帰す。」　二人は「いちばんいいのは人魚を海に帰すことだ」（二四八・上18）と最初から気付いており、それを実行に移そうとしている。なお、「返す」ではなく「帰す」という表記なのは、人魚が「拾得物」（二四七・上16）ではなく「ひと」（二四六・上10）のようであると感じているから。

●二五一ページ

上14 海岸沿いの土手には桜の並木があった。　人魚を手離す場面は、桜の花びらが舞い散る中で進行する。人魚と桜の魅力的、魔力的なイメージが重なり合う。

上15 ひっきりなし　切れ目がないこと。絶え間がないこと。「引き切り無し」の音便。

上15 葉桜　花が散って若葉が出始めた頃の桜。夏の季語。

上17 うららか　空が晴れて、日影の明るくおだやかなさま。多く春の日にいう。前出の「葉桜」が初夏を表す言葉であり、今がまさに春と夏の境界であることを示す。

下4せっぱつまって　「せっぱつまる」は、切羽詰まる。物事が差し迫る、全く窮する、最後の土壇場になる意。

下16 さきほど来　先程から、少し前からの意。

下17 目をしばたいた。　しきりにまばたきをすること。しばたたく。

●二五二ページ

上4誘う口調　「自分の声ではないみない」な「甘い声」のよる誘惑の言葉。人魚が「わたし」に言わせているとも考えられる。または、

「わたし」とエノモトさんの執着を共有する関係性を表しているとも読める。二人が執着を捨てることも、続けることも、執着を共有することに他ならない。

下8「せえの」　悠長な声とあるが、人魚に魅了されている状況下では精一杯の声だろう。また、この声は「わたし」とエノモトさんが二人で出す、人魚への執着に抵抗する声である。

●二五三ページ

上2白磁に切れ込みを入れたような目　この表現と「赤く薄いくちびる」（上7）という人魚の造作が、桜の花びらのイメージと重なり合う。

キー・ポイント　**「離さない」**　これまで「わたし」とエノモトさんの二人の側から「離れられない、離せない」苦悩が語られてきたが、一転して、人魚の側から「離さない」と言われる。伝説上の人魚はその声に特別な力があり、美しい声で人を惑わすこともある。これまで何も話さなかった人魚のたった一言発する言葉が、強い力を持っているのである。さらにこの直後、「はっきりと響く声で、人魚は言った。」「わたしの顔を見据えて、人魚は言った。」とたたみ掛けるように反復する表現によって、人魚の言葉の衝撃を強調している。しかし、そのあまりに強烈な声の力によって、離さない主体だったはずが、執着される客体でもあるという事実が暴かれた瞬間、人魚の魔力は恐怖に変わるのである。

上12うわあ、という声が、わたしの口からもれ出た。　かつてエノモトさんも同じ声を出した。「もれ出た」とあるように、あまりの恐怖が意図せず声に変わったのだろう。叫び声なのか、つぶやくような声なのかを想像することで、この恐怖がどのような心情なのか、さらに考えを深めることができる。

下11桜が、海岸にまで飛んできていた。　桜の花びらと人魚のイメージが重なり合う場面はこれまで何度もあったが、人魚そのものが、桜が見せた幻想だったとも読める。散っていく桜は、その魔力を使い果たしていく姿のようでもある。

●二五四ページ

上2桜はすっかり散っていた。　時間の経過、季節の移り変わりを表わす。桜が見せた人魚という幻覚もすっかり無くなっている。

キー・ポイント　**魅入られた**　「魅入る」は執念をかけること。多く受け身の形で、取り付かれること、強い魅力に惹きつけられ、心を奪われること。「人魚、なんだったんだろう。」という「わたし」の問に対する答えである。つまり人魚とは、何かに魅入られることの象徴だということである。この作品は二人が人魚に執着する、魅了される物語であり、また、執着や魅了という気持ちそのものを描いた物語であるとも言えよう。

下1桜が散る様子ばかりを克明に覚えているのだった。　人魚ではなく桜を覚えているということからも、全ては桜がもたらした幻想であったとも読める。

注意する語句

（＊で用例を示した）

うっちゃる…ほうり出す。ほったらかす。
＊宿題をうっちゃって友達と遊ぶ。

もったいぶる…いかにも重々しくおおげさにふるまう。
＊彼は昨夜の出来事をもったいぶって話し出さない。

そぞろ…気持ちが落ち着かないこと。そわそわするさま。
＊試験の結果が発表されるまで、心もそぞろだった。

涼しげ…ほどよく冷たくて気持ちのよいさま。さわやかであるさま。
＊涼しげな風が吹いてきた。

後じさる…前を向いたまま後ろへさがる。後ずさる。また、ためらってぐずぐずする。
＊猛獣を前に、彼は後じさった。

てきぱき…物事の処理や対応など、動作の機敏なさま。言葉や態度が歯切れのよいさま。
＊彼女は隊員にてきぱきと指示を出した。

歯を食いしばる…苦痛や困難・怒りなどを、歯をかみ合わせて必死にこらえる。
＊歯を食いしばり、声を抑えて泣いた。

魅入る…執念深くとりつく。心を奪う。
＊彼は悪魔に魅入られた。